

本陣当主の正装—大名から賜った“袴”—

かみしも
袴

(草津宿本陣蔵)

この資料は、江戸時代の武家の公服もしくは礼服として使用された「袴」で、史跡草津宿本陣に残されているものです。上下とも書きますが、文字通り上半身に着る袖のない上着である肩衣(かたぎぬ)と下半身にはく袴(はかま)のセットで、同一の生地で作られていることが特徴です。下に小袖(こそで)を着て、その上から袴を着用します。

武家の礼服であった袴が、なぜ本陣に残されているのでしょうか。本陣当主は、大名などが本陣に休泊する際、その大名家の家紋がついた袴を着用し、対応したと伝わりますが、そのことを示す史料はありません。現存する袴の家紋は、よく田中七左衛門本陣を利用していた大名家などのもので、写真は膳所藩主・本多家のもので、これらは、大名家から拝受したものと考えられており、36セットが、箆笥(たんす)に収められた上で、藩の名称などが張られ、保管されていました。

肩衣の形は、大きく分けて曲線状のものと穏やかな直線状のものがあり、これらにより時期を推定できます。肩の形状が曲線状になるのは、寛政(かんせい)年間(1789~1801)前後に流行し、幕末頃には穏やかな直線をもつものが一般化したと言われていています。これらのことから、伝世する袴は18世紀末頃~19世紀頃に制作されたものであることが分かります。

大名から拝受したという歴史とともに、その形状から肩衣の変遷を知ることでもできる大変貴重な資料です。

(令和8年4月・草津宿街道交流館 田中 雪樹野)

